

うちから車で10分の場所にあるカフェ「ふらつとyui」は、毎日日替わりのランチを提供してくれているので、最近よく利用している。本紙でも度々記事になったことがある「しきしまの家」という旧保育園をリノベーションした施設の中にある。

先日、仕事の打ち合わせのついでにランチしましようということ、ふらつとyuiに集合することになった。平日というのに、ほぼ満席。数量限定の「本日のランチ」になんとかありつくことができた。メインは、揚げたてサクサクのアジフライとカキフライ、鶏肉のトマト煮の豪華3種。こんもりと盛られたご飯に味噌汁。副菜には糸こんにゃくの炒め煮。大満足の内容で税込800円。思わず頬がゆるむ美味しさだ。

食事を終えて、仕事仲間を見送る。いつもだったら私もそのまま帰るところなのだが、その日はしきしまの家から車で5分の場所にある中学校に夕方子どもを迎えに行くことになっていたため、そのまま事務仕事をして時間を過ごすことにした。

ランチのお客さんが誰もいなくなっただけなく静かだったが、15時過ぎた頃、にわか賑やかになり始めた。どうやらしきしまの家のすぐ近くにある敷島小学校と杉本こども園の下校時間らしい。入り口付近にある駄菓子コーナーはあつという間に子どもたちでいっぱいになっていた。園児の男の子が小さなポシエットを肩から下げ、駄菓子を持ってレジに行くと、しきしまの家代表の後藤哲義さんがうれしそうに笑顔で出迎えていた。ふらつとyuiの店長、成本由紀子さんが「ハッシュドポテトがたった今揚がったよー！」と子どもたち呼びかける。豊の小上がりスペースでは、お母さんと並んで座っている園児がおにぎりにか



## ふる里の未来変えるかも しきしまの家

エッセイスト  
きうら ゆか

ぶりついている。「おにぎりいいねえ」と話しかけてみると「ラーメンやポテトを食べることもあるよ」と教えてくれた。

小学生、園児とお母さんが、思い思いにしきしまの家で過ごす光景を目の当たりにして、ある経験が思い出された。11年前、こちらに引っ越してきた当初、長女が6歳、次女が4歳でこども園に通っていた。年少から年長までで10人ほどの家族のような園。楽しい思い出ばかりだが、課題に感じていたことが一つあった。手頃な公園が地域にないため、園が終わった後で子どもたちが「もっと遊びたい」と言った場合、誰かの家に集合して親が送迎する必要があったことだ。

しきしまの家があれば、園児の母たちはどこで遊ばせようかと悩む必要がない。しかも、ここでは地域の子どものことが可愛くて仕方のない人生の先輩たちが両手を広げて迎えてくれる。子育てをする親にとって、そんな大人とつながれる居場所があると、ということがどんなに心強いことか。10年後、子どもたちはきっと大人たちの温かさ、おにぎりの味と共に故郷を思い出すに違いない。

人口減少・高齢化が進む地域で「みんな支え合っていること」「ふるさとをなくさないために地域外の人とも積極的につながること」を目的に「ふつうの住民」が力を合わせてゼロから作り上げたしきしまの家。子どもたちのいる風景が「未来が変わる証拠」のように思えた。「やればできる」を目の前で見せてくれるしきしまの家は、私に勇気を与えてくれる。



おいでん・さんそんセン  
ターの人気ローカルメ  
ディア「縁側」の元編集長  
で、現在は運営者